

東京多摩地区現代俳句協会

多摩のあけぼの

会報 No.137

多摩風土記（疎開）

太平洋戦争末期空襲の激化にともない、多摩の各地は、区部の小学校児童の疎開先となり、白洲次郎夫妻の南多摩郡鶴川村（現町田市）など疎開先となった。八王子中野町には、水原秋櫻子が昭和二〇年四月十日の空襲で病院と自宅を焼失後仮寓した。八王子市暁町の名綱神社には、（冬菊のまとうはおのがひかりのみ 秋櫻子）等の句碑がある。（健介）



もうひとつの療養俳句

― 評伝・目^め迫^{さく}秩父と『雪無限』

水野 星闇

さみしからず寒菊も黄を寄せ合へば

目迫秩父（昭和38年作）

この句を山本健吉著『句歌歳時記』の「冬・新年」の中に発見し、戦中戦後の厳しい一時期を懸命に生き抜いた俳人・目迫秩父に注目した。嘗ては、結核で胸を病み、その苦しみの中からも多くの文学作品が生まれて来たが、療養俳句と云えば、誰しもまず挙げるのが石田波郷であろう。同様に壮絶とも云える闘病生活から珠玉の俳句作品を詠んだこの俳人も、昭和の俳句史を刻んだ一人であった。

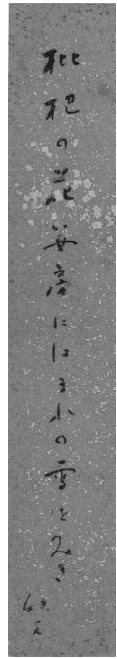
目迫秩父は、昭和33年度の第7回現代俳句協会賞の受賞者で

ある。当時、協会賞は有力な新人発掘の為の賞であった。『現代俳句協会50年史』を読むと、選考過程では、目迫、石原八束、香西照雄の3人が最終候補に残り、激しい討論の末、目迫に決まったとある。（因みに、翌年の受賞者は香西であった。）

協会70周年を期して刊行した筆墨集『俳句ひらく——現代俳人の筆跡——』の編集に関与した際、果たして目迫の色紙・短冊は有るや否や、また鑑賞文は誰に頼むかが話題となった。幸いなことに、短冊は秋尾敏氏（「軸」主宰）の管理する「鳴弦文庫」が入手したものが使える見通しとなった。次いで、鑑賞文の依頼である。これには異論無く、目迫と共通の師である大野林火に学んだ大串章氏（現・俳人協会会長）に決定。問題は誰から頼むかである。結局、或る機会に筆者が大串氏に会うこととなり、お願いすることとなった。その際、同氏は珍しい目迫の短冊が見つかったことを大いに喜ばれ、是非自分に書かせて欲しいと即決承諾された。筆墨集掲載句は次の句。

枇杷の花安房にはまれの雪をみき

後に、『現代俳句』誌の令和元年11月号の表紙の裏（所謂「表2」）にもカラー版で載録されたその短冊は、赤い地色に雲



母を散らした美しいものである。文字も小さく地味な枇杷の花を表すにふさわしい筆致である。作者はとりわけ枇杷の花が好きだったようで、大串氏も「枇杷咲くや断続の詩は貧に尽き」(枇杷咲いて湊まぶしくありにけり)などの句を、鑑賞文の中で紹介している。

目迫秩父は一九一七年(大正6年)横浜生まれ、本名・文雄。県立商工の商業科を出たが、当時同校で教鞭を執っていた大野林火との交わりは無かった。戦時出征中に胸部負傷、父亡き後の母弟妹六人を養いながら、再就職先で働いている時に会社句会指導者の林火と再会する。林火が「濱」を創刊した際に秩父と俳号を改めて参加、以後終生師事した。勤務先での労働争議に巻き込まれ、結局その責任を取らされて退社、その後の生活苦と胸部疾患の中で、句集『雪無限』を編んだ。再就職先では大阪にて会計職に就くも病状好転せず、入退院を繰り返す。一九六三年(昭和38年)3月18日、46歳の誕生日を迎える六日前の朝、横浜で咯血による窒息で亡くなった。

改めて『雪無限』を読んでもみる。昭和31年6月刊の同句集は、昭和21年以降約10年間の計四三二句を収める。作者30歳代の、



目迫秩父(昭和37年11月)

病や貧困と闘いながらの、旺盛な句作の意欲が見て取れる。

湯はてりの吾子を毛布につつみわたす

汗の膝につまんだす子のすべりつつ

天瓜粉の一刷毛花のごと胸に

せがまれしさかだち吾子と裸なり

何とも見事な「吾子俳句」である。のつびきならぬ生活苦との格闘の中でも、生まれたばかりの長男を題材として、情熱的に句作に励み、結社誌「濱」の巻頭にも躍り出た。しかし社会情勢の激動は、好まざるとも目迫をその前面に押し出し、それ故に彼の俳句は、社会性俳句の時代の先駆けとも受け取れる作風を帯びた句となった。

土用波わが立つ崖は進むなり

狂へるは世かはたわれか雪無限

駅の椅子かたく詮なし立てば寒し

外套のまま寝るまでを壁に寄る

二句目は当句集の標題句である。労働争議の犠牲となった経緯は明らかではないが、いかに才気煥発の目迫であっても、貧困と病を抱えながら、労働運動に立ち向かうのは容易ではなかったであろう。師の林火は、この句集は「心境小説」であるとも云っている。

野はいつもさびしや遠き山に雪

雪原の大き夕日に一歩寄る

外套も鞆も海もただ黒し

としびのごとき野分のからす瓜

空蟬のみちんとなりて海へ散る

戦後開発された新葉は一時的に小康状態をもたらしたものの

の、根治にはほど遠く、病状の悪化により外科手術も諦めざるを得ず、度重なる咯血の中、不治退院となつた目迫は横浜に戻る。俳句に詠われた景は、やはり病床やそれを取り巻く事物とならざるを得ない。

めつむれば楽しや晩夏のぞみ燃ゆ
よべわれの仮死に夏月真赤とよ

晩夏光毯の行方の昏き方

刻々と病室くらみ月遠のく

咳くときの身の硬直のかなしけれ

冬空に病顔向けて息吸へり

消さで置く寒燈のもと薔薇一輪

作者にとつての気懸りは、やはり妻子や母のことであつたろう。

母へ送る金いまだしもつばくらめ

白玉やうなづくばかり子の返事

われ弱く抱くもならじか汗の子を

吾子遠く笑顔泣声虫の闇

からたちの青芽まぶしや遠き妻

妻の眼を知りつつちまき臥して食ふ

梅雨湿りせる母の文母遠し

生きて今宵妻子の前に絵双六

霜踏む音おん母われが老いしめき

妻の衣のくれなる奪ひ年送る

喪のごとく黒き冬衣の厨妻

師の林火は、度重なる咯血にもめげず送られてくる目迫の句稿を前に、しばしば絶句したという。

すきまなき宙の雪片相触れず

夏雲や為すことのまだ累々と

ほろり落つ汗か涙かわれ知らず

葉より落つ夏満月の蝸牛

初蝶や月日尊く過ぎにつつ

眠れば鉄色じみて枯山河

芝焼けり病菌を焼き尽すごと

燈寒し注射ぶすまに身を投げて

暮春おのが解剖体を頭に描くも

頭髮のねばりて重し梅雨の雷

頭をあげて昏きを愁ふ黴衾

黴一条余せるくらき臥所待つ

北枕して木犀の香に近し

瘦首が着ぶくれ肩に嵌り咳く

熱に狂へる咳大尽と申すべし

雪見詰めうらぶれまじくゐたりけり

逆境にあつても、やや古風なスタイルの中にしつとりとした

情感が滲み出るリリカルな作風が、本来の目迫であつたと句友

達は証言している。時には、覇氣満々の頼もしさも感じさせる

実作一本の俳人であつた。しかし、暗く重たく、そして澄み

透って行くその作品群は、突然の死によつて永遠の終結を迎え

たのである。

師の林火は、突然の目迫の死を嘆き、次の悼句を捧げた。

寒むや死に抗しつづけし薄屍

誰が禱りし焼かれかぎらふ千羽鶴

百千鳥樞の汝を運ぶ上

林火

(了)

あけぼの集

有終の美とは正しく冬紅葉まき 東久留米 青村 萌生
 間をあけて座る長椅子そぞろ寒 国分寺 秋山ふみ子
 嘘うそと囁くピーマンひん曲がり多 摩 足立喜美子
 バッタ群る疾く青空を食べ尽くし小 平安達 昌代
 文面は静かな暮らし冬に入る 清 瀬 穴原 達治
 エンディングノートの余白冬あたたか 稲 城 新井 温子
 口ずさむ小学唱歌 白秋忌 八王子 荒川勢津子
 立冬やほら吹きチャップリンの自伝多 摩 有坂 花野
 おう来たか兜太朗人冬日向 国分寺 安西 篤
 みたらしの杓持参せり初参 青 梅 飯島 智
 誠実に生きて今日あり十三夜 足 立 飯田 和子
 冬の空機体の光る三分間 小 平 石橋いろり
 紅玉の酸味昭和のひとつかけら 練 馬 石原 俊彦
 院展に裸婦それぞれの物思ひ 八王子 市川 春蘭
 風音の鋭くなりぬ今朝の冬 青 梅 一ノ瀬 順子
 冬帽買ふ半跏思惟像見向きもせず 狛 江 伊東 類
 醉芙蓉水曜日には寝坊する 調 布 絲布 みこ
 小春日や猫が耳搔く後ろ脚 町 田 稲吉 豊

犬も見る丹沢富士へ冬没り日 町 田 今田 述
 深く吸ふ秋晴れ青き空があり 東村山 岩田 夏恵
 秋風や親友ともと別れし宇治の町 東久留米 上原 重一
 春めくや思ひ出ばかりみんな逝き 町 田 宇賀いせを
 自販機の「あたたかい」を押す秋開けて 武蔵野 内田 牧人
 ふり向きて別人なりし冬木立 武蔵野 江中 真弓
 影笛に焦がれ死にする影の鳥 府 中 大井 恒行
 長靴は園芸用と妻の 秋 日 野 大槻 正茂
 青空のつばにはまりし寒の菊 立 川 大友 恭子
 寒卵あなたを産んだ遠い部 屋 川 崎 大西 恵
 着ぶくれて換気の午後や尾長鳴く 三 鷹 大森 敦夫
 ラケットは自由なおみの黒マスク 昭 島 岡崎たかね
 鰯雲コロナ疲れの独り言 武蔵野 岡崎 万寿
 広い寒いわが青春の四畳半 小金井 岡本 久一
 星流る地下道を地下鉄核のゴミ 三 鷹 小川 葉子
 菩提寺のコスモス揺れる駐車場 飯 塚 奥野 亜美
 朝餌撒く鶏の雄叫び寒日 和 昭 島 尾関 英正
 言霊の鞠きの宿る林檎剥く多 摩 柏田 浪雅

あけぼの集

平凡でいいではないか冬林檎 稲 城 門野ミキ子
 どこかで汽笛ガラスへ響く文化の日 西東京 金谷サダ子
 踏みあるく一期一会の大枯葉 日 野 亀津ひのとり
 お喋りが谷間滑らす猪一頭 西東京 河 順子
 ひとり居の自由不自由や春を待つ さいたま 河井 時子
 住む家の無い人増えて峰に雪立 川 川島 一夫
 荒星や年下のビル群ばかり大 田 川名つぎお
 ハローウィンもコロナ自粛のニュー・シブヤ調 布 菅 さだを
 揚げたてのカツを切る音落葉踏む 清 瀬 神崎 幸子
 ジョーカーは掌中にあり憂国忌小 平 城内 明子
 初雀 孔子廟より 到来す 八王子 国枝金之助
 心身に宿る怠慢いのこずち 武蔵野 高坂 栄子
 カキフライじゅわっと海を滴らす 西東京 幸村 睦子
 黄落を埒頭へ急ぐ水素バス 町 田 小山 健介
 綾取りの指狐火をからめ取る 西東京 近藤 斗升
 六名任命せずかの地下茎の芽吹き立 川 今野 修三
 くわんおんの仄かな朱唇蟬時雨多 摩 斉田 仁
 贅沢は素敵だと知ったあの八月 八王子 櫻本 愚草

コロナ禍のまつ只中に秋刀魚焼く 東久留米 佐々木克子
 身の内を覗かれている湯冷めかな 府 中 笹木 弘
 角筈に天井棧敷一の酉調 布 佐藤 茉
 カリヨンや冬の噴水秀を違へ 昭 島 佐藤 光子
 笑み栗や口尖らせて異をと 中 佐藤八重子
 十二月かなしいものから燃やしてゆく 青 梅 沢田 改司
 廃寺に霊気畳みし木下闇 八王子 柴 れいこ
 灯すとは待つということ 烏瓜 杉 並 島 彩可
 冬めいて亡母と語りし故郷なく 国分寺 島田 澄子
 大根を炊いてひと日の過ぎゆけり 足 利 清水 弘一
 アンテナにつく鶴の羽繕い 西東京 白尾 幸子
 呼吸する水の中いて寒の魚調 布 白戸 麻奈
 古女房底光りして年の家世 田 谷 鈴木 浮葉
 雑草に点火のごとく曼殊沙華立 川 鈴木かずえ
 秋晴やだあれも居ない遊園地小 平 鈴木 寿江
 紅葉且つ散る妖精の鎮魂歌 小金井 鈴木 佑子
 食われない鰯の命銀光り 町 田 栖村 舞
 日矢受けて忽ち燃ゆる紅葉山 板 橋 諏訪部典子

あけぼの集

鶏を子が追ひ払う粃筵 東村山 瀬尾 恵澄
 託されし後事のあまた花八手 小 平 関 梓
 セーターの闇から這い出すきつね耳 調 布 芹 沢 愛子
 秋蝶の脚ほど細くはのはの声 武蔵野 高野 公一
 理不尽な渡り廊下や冬の恋 清 瀬 谷 村 鯛 夢
 大晦日背中いっぱい子守唄 国分寺 玉井 豊
 手袋の糸はほつれど想い満つ 稲 城 玉 木 康 博
 GOTOと十一月のしたたかさ 日 野 玉 木 祐
 人気なき大路の秋は失せてをり 東久留米 田村 實
 からからとなにか鳴る音山 眠る 三 鷹 田 山 光 起
 便器洗えば冬の銀河が蘇る 八王子 辻 升 人
 晩秋の風のもちくる片 便り 東村山 寺尾 令子
 晴れ過ぎし海を眩しむ三橋 忌 立 川 遠 山 陽 子
 姿見の女 三代 七 五 三 西 東 京 戸 川 晟
 赤のまま母にも恋はあつたはず 杉 並 飛 永 百 合 子
 初しぐれ主流となりしテレワーク 相模原 鳥海 高 志
 したたかに生きる古書店 鏡花の忌 清 瀬 永 井 潮
 日おもての岩にはりつく冬の蝶 町 田 長 澤 義 雄
 茶事終る時雨曇りの蔵の街 西 東 京 中 田 とも子

稜線は落城の色 冬夕 焼 国 立 中 野 淑 子
 ためらわず踊る阿呆となりにつけり 座 間 長 野 保 代
 実直に生きし父なり鳥 威 青 梅 中 村 ゆ き 子
 ブリキ缶添へてサロマの牡蠣 届く 武蔵野 夏 目 重 美
 寒鴉待つ人もなき吾に啼く 八王子 夏 目 瑤
 小春日や灰と影ある点 字 本 町 田 成 戸 寿 彦
 墨堤の光あつめて 帰 り 花 世 田 谷 西 前 千 恵
 忙しく何もせぬ日や 藪 柑 子 昭 島 西 村 智 治
 朝顔や杖失えば草に這う 多 摩 坂 山 裕 子
 冬の田に農夫の足跡 深くあり 三 鷹 根 岸 敏 三
 靴音も楽器の一つ 銀杏 散る 三 鷹 根 岸 操
 よい予感大根おろしの 甘い 朝 小 平 野 口 佐 稔
 蒼穹に深紅目映し 秋の 薔 薇 八 王 子 野 澤 勝 美
 それぞれに違う 風 音 枯 野 道 青 梅 萩 原 芙 沙
 口パクで歌う 今年 の サ イ レ ン ト ナ イ ト 武 蔵 野 蓮 見 順 子
 千枚漬一枚目から 噛 みにけり 武蔵野 蓮 見 徳 郎
 三密を惜しげなく 散 らしいわし 雲 羽 村 花 貫 寥
 コスモスに誘われている 平 常 心 多 摩 平 山 道 子
 鬼の子の揺れは 米 寿 の 息 づ か ひ 鎌 倉 藤 倉 頼 江

あけぼの集

石榴打つ父の知らない母の過去調 布藤原はる美
 孤独死や戸口に柿の落葉つむ練 馬淵田 芥門
 歩まねば埋もれるばかり落葉道多 摩星野 幸子
 ふたりよりふえない家族目高飼う羽 村堀部 節子
 客土撒くすきつと若き造園士羽 村堀部 嘉雄
 初東雲一人遊びのできる妻国 立前田 弘
 一人は二人二人は一人草紅葉国 立前田 光枝
 カマキリやさみしき刻は手を洗う木更津松本 まり
 春寒し日々の隙間の針仕事八王子松元 峯子
 寒卵いづもどこかで移動する 東久留米 三池 泉
 ひとめばれマスクの奥は謎だけど 東久留米 三池しみず
 一品に妻の古漬今年酒 東久留米 三浦 禎三
 鱗雲いまが潮時かも知れぬ小金井三浦 土火
 冬うらあきらめに似てものを縫う世田谷三浦 文子
 水のように身体澄みゆくLED町 田三木 冬子
 小流れに鍬ひたされて文化の日国分寺水落 清子
 石路の黄に囲まれ八五郎の碑のひそと三 鷹水野 星闇
 深川は水路廻らす桜鍋日 野満田 光生
 ふるさとの小松菜を摘む弟と昭 島宮腰 秀子

切り株は静かな器兜太の忌調 布宮崎 斗士
 もう会えぬ人ばかりなり寒昂三 鷹宮澤 雅子
 露天風呂三密守る秋の宿小 平宮寺 幸子
 秋刀魚焼く無頼の過去を煙にして 国分寺武藤 幹
 柀の香やチェロの音によりそいぬ小金井村井 一枝
 一族の幸や曾孫の七五三多 摩村山 良
 無為にしてアライの無き小春の日武蔵野望月 哲土
 息づかひ激しき遺墨梅真白立 川山口 楓子
 遠い目をして冬の日につつまれる町 田山崎せつ子
 歳晩の雲は迷ひもなく流れ 東村山山崎美沙緒
 老いにコロナに半分のお正月府 中山本 徳子
 猫眠るベンチの下の戻り花八王子山本ひまわり
 日向ぼこ定年仲間のひとくさり多 摩山本みつし
 出来立ての棺積み込む月明り府 中吉澤 利枝
 浅瀬にて鳴き合う鴨へ後の月東大和吉田雄飛子
 マスク取り冬満月の光嗅ぐ 東久留米 吉平たもつ
 捨つるもの持たぬ気楽や着ぶくれて国 立吉村春風子
 ごり押しのあとの後悔玉子酒立 川米澤 久子
 初春や力まかせに八十年青 梅渡部 洋一

青木 一郎

天高し浮子一寸の影を立て

渡部 洋一

空気が澄み、晴れ渡った空の日に釣りに行き、のんびりと釣り糸を垂らす。浮子がビクンと動くのをじっと待っている。なかなか釣れない。浮子の影も小さく揺れている。「浮子一寸の影を立て」という表現が「天高し」とマッチしている。

穴原 達治

鳩が鳴くけだるいまひる夏が逝く

山崎せつ子

夏の昼下がり、鳩の伸びやかとも言える声には切迫感が全くない。ふと、日常から距離ができる一瞬。まさにけだるい感覚は夏の終りの情景を正確に描写して、感覚を共有できるだけに惹かれる。

飯田 六斗

蛇去れど元にもどらぬ足運び

新井 温子

ハイキングで出会ったのか、自然界で偶然接する生きもの、夫々好き嫌いがある様だ。掲句は、突然ぬるぬるとした躍きに「蛇だ」の聲が。一瞬体が凍んだ。蛇は去ったが己が身は硬直、足運びがもどらぬ。偶然の出会いを、一句に纏めた佳句。

石原 俊彦

泣けば済むころの遙けし赤とんぼ

城内 明子

幼い頃、何か気に入らない事があるとき泣いたような気がする。その度に祖母や母がとんできて望みが叶う。今は遙か遠い思い出となつてしまつたが、それは何故かいつも庭に赤とんぼが飛んでいる景色であつた記憶がある。郷愁を憶える。

一ノ瀬順子

四姉妹の墓参の自肅甲州弁

岡崎たかね

甲府盆地の西の外れに生まれた我が四姉妹。両親の墓参もままならぬコロナ禍の自肅要請に、互いに電話で実家の様子や身辺の事などを話す。その会話の端々に甲州弁が混じる。家籠りの明け暮れ、コロナの終息を願う毎日である。

伊東 類

遮断機の奥の時間へ黒揚羽

小山 健介

カンカンと遮断機が鳴る。同時に時は止まり、人々の呼吸のみが脈打つ。黒揚羽は実景とも作者の心象とも受け止められるが、通過する列車の響きと踏切の静を手中に時を支配するの荘厳な黒揚羽一頭の彩りなのであろう。

内田 牧人

火の陰にまだ誰かいる遠い昔

沢田 改司

遠い昔は大戦時、前線・原爆は素より国内各地も空襲で焦土化した。私は逃避先から夕方市内に戻った処、何と明かりが！ 良く見たら未だ燃え残りの炎だ。その火の陰に蠅く人影が！ 凄惨な情景に息を呑んだ。未だに脳裏から離れない。

大西 恵

すき嫌い揺れる思いや振り花

鈴木 佑子

つい花占いをしたくなるほど心が揺れている。目の前にある振り花では古いもできないと思つたが、よく見ればボール（茎）にそって、好き嫌い好き嫌い……と咲きのほつているようだ。振り花自身が花占いをして咲いているように思えキュート。

大森 敦夫

間取図に夕焼雲が見える窓

島 彩可

家の新築であろうか。間取図を見ながらのわくわくした気持ちがよく伝わってきます。この家の風の通るダイニングでは夕焼雲を眺めながらワインなどを愉しめそうです。マドで始めてマドで止めたところもまた心地良い。

尾関 英正

天高し浮子一寸の影を立て

渡部 洋一

太公望を彷彿させる一句。一人のんびりと池で釣りをする光景が目につく。季語「天高し」と中七「浮子一寸の」にみる天地の対比が見事。高い天から池の浮子へとフォーカスしていき、その影に秋の日差しを感じとる。余情溢れる名句。

亀津ひのとり

白南風におく結願の杖ふたつ

谷村 鯛夢

見過ごしそうな一句ですが、余分な言葉は一切無く杖ふたつの眼前直覚。梅雨明けの爽やかな風の中、結願の札所に漸く辿り着いた安堵感、二人で歩き続けた遍路を振り返る様子が見えます。シンプルにして爽やか、且つ深い一句と思います。

川島 一夫

千年後夏のマスクをした木乃伊

岡本 久一

今では喩え俳句の全盛時である。私は長い間、それを嫌ってイメーシによる直接表現を目指した。最近では喩えも少し用いている。この句は丁度中間の様な句。喩えが新鮮で夏のマスクも千年後も木乃伊も素晴らしい。こういう喩えなら大賛成。

河井 時子

空っぱの象舎に朝の日終戦日

米澤 久子

終戦末期、日々の餌の減量に苦しみ、芸をしても叶えられずに餓死させられた上野動物園の象「花子ちゃん」。秋山ちえ子さんのラジオの朗読「かわいそうなぞう」を涙で聴きました。朝の日がすべてを語っています。子供達に伝えたいですね。

城内 明子

右手よりなぜか涼しい左の手

前田 光枝

右手・利き手は生きる為の食事、重要な事物の最終決断の押印・サインも担うのを始め、雑用から書画等の芸術にまで関わる。終日どれ程働き、責任を負わされている事か。実に暑い、暑苦しい。しかし左手の涼しさには一抹のさびしさも。

高坂 栄子

海町の四葩は少し夜を遊ぶ

安達 昌代

海辺の町に咲いている紫陽花を見て、ひととき鮮やかな青色に、もしかしたら夜になるとこっそり海へ入り泳いでいるのではないかと想像する作者。メルヘンチックな世界に引込まれ、楽しい一句になっている。

佐藤八重子

炎天の跨いで通る捨てマスク

三浦 文子

マスクをつける生活を余儀なくされ、コロナウィルスのついていそうな物に神経質になってしまっています。礼儀作法では、物は踏まない、跨がない。でも咄嗟に跨いでいます。コロナ禍での新常識をさりげなく読み込まれた一句です。

清水万ゆ子

棒状の雨音流れ秋深む

金谷サダ子

十一月の声と共に秋も深まって来る。今日は朝から雨、それも棒状の雨が窓をた、き、正に棒の様な深秋の雨だ。その雨音を聞いていると、「あ、今年も終わりに近づこうとしている。」「コロナ禍で春から夏が過ぎた。一層秋の深まりを感じさせる。」

白尾 幸子

遠雷や悶々蟄居の明けはいつ

三浦 土火

日常のあたりまえに対する大きな喪失感の中で、どう生きるかが問われている。のしかかる経済不安、行動抑制によるストレス等々、作者の「悶々蟄居」に同感した。今回ほど「横につながる」との大切さを痛感したことはない。

鈴木 佑子

鳩が鳴くけだるいまひる夏が逝く

山崎せつ子

夏の暑い真昼の無聊がリアルに表現されていて心ひかれる。下句の「夏が逝く」に寂寥感がある。畳みこむ素材のリズミカルな羅列、「鳴く」「逝く」の動詞の呼応が効果をあげている。

栖村 舞

草紅葉誤植だらけの足の裏

前田 弘

仏足石がこの野に発見されたという。草紅葉を踏みしめたその先にそれはあった。だが、書かれてある文字は五七七七七の形を持つ仏足石歌とは思えない。誤植か？文字か？宇宙人からのメッセージ？いや足跡自体が宇宙人のものかも。

芹沢 愛子

ステイホームラジオはホテルカリフォルニア

松本 まり

六〇年代も終わるころ爆発的にヒットしたこの曲に青春を蘇らせる人は多いだろう。歌詞は暗喩に満ち、多様な解釈を呼んだ。「みんなこの囚人だ。自分の意志で囚われた」は今の状況を思わせる。また映画「恋する惑星」でも繰り返し流れた曲。

玉井 豊

先に逝きし弟月下のすべり台

堀部 節子

月の光に照らされた、すべり台。作者はそのすべり台をみて、先に逝ってしまった弟を思い出す。ステンレスが淡く輝くすべり台が、子供のころの自身と弟を鮮やかに映し出す。

田村 實

バラ真赤笑みつつ棘も研いでおり

水落 清子

鮮烈なバラの赤色に捉われた作者は、棘も身の内の思いがあり、「笑みつつ棘を研ぐ」の措辞を得たのであろう。

「バラの棘は表皮が変形したもの」と『広辞苑』が教えてくれた。

飛永百合子

秋めきて夫亡きことがまだ不思議

三池 泉

三池さんは長いことご主人様を介護されていた。いつも座っていた椅子、お気に入りの窓辺、思わず声をかけてしまう。が、もう居ないのだ。でも大丈夫。姿が見えないだけで、三池さんの胸の中に永遠に生き続けているから。

永井 潮

すすき原抜け切込湖刈込湖

水野 星閣

畳み込むK音の連続を生かした歯切れよいリズムが快い。奥日光の標高千六百メートル、沢が火山噴火の溶岩流にせき止められ、湯の湖や涸沼等と共に出来た二つの湖。東西につながり、秋が早い湯本温泉から光徳牧場へのハイキングコースに沿っている。

中野 淑子

青鷺の白肅片足立ちの行

安西 篤

コロナ禍の真つ只中にあつては行法も選択肢の一つかも知れません。

世界的に混迷する世相を青鷺の姿に重ね人間への警鐘ともとれる事柄を、ユーモラスに捉えた感銘の一句。その姿を彷彿とさせる。

淵田 芥門

わが飢ゑも眠りも蛇に食はれけり

柏田 浪雅

生きることの艱難辛苦や、死という永遠の安楽に対してさへ、超越的で神的の象徴として「蛇」と隠喩。拙い解釈だが、此句人生無常を諦観し達し得た心境か。芭蕉句の、道のべに咲く木槿の儚さと、飄々たる馬の仕草を対照に踏まえ詠まれたのだろう。

堀部 節子

あの世には国境はなし新走り

門野ミキ子

その年の新米で醸造された、搾りたての新走り。御岳溪谷の瀬音を聞きながらの「澤の井の蔵開き」はコロナ禍のため、今年はオンラインでの蔵開きであった。盃の新酒から彼の世までを連想させて、スケールの大きい一句である。

松元 峯子

イーハトーブの森番めいて月夜草

近藤 斗升

宮沢賢治の求めた理想郷イーハトーブ花巻。森に吹く風は青く透明で、樹々や木の葉は詩を歌う。そんな森の番人に月夜草はびったりです。夜になると青白く光ります。猛毒を持っています。

さあ、怖い童話が生まれそうですね。

三浦 禎三

相続の放棄依頼と梨届く

神崎 幸子

俳句の先輩から、句を作るときは読み手が考えさせられる句を作れと言われました。どんなところから相続放棄を依頼する手紙が来たのか、またその後どうなったのか、色々考えさせられる句です。ドラマのようで想像するだけで楽しくなります。

三浦 土火

天高し浮子一寸の影を立て

渡部 洋一

秋の野べら釣りでしょうか？
広がる青空と微妙な当たりを感じするへら浮子との取り合せが絶妙。「一寸」にこの釣り人のこだわりを感じる。
中七以下のたたみ方も俳句らしい。
何時かまた尺べらを！と願う。

三木 冬子

葡萄棚スタッカートの鉄音

石橋いろり

スタッカートは音符ごとに音を短く切つて歯切れよく奏すること。その小気味よさが、さわやかな空の下で葡萄を収穫する鉄音にマッチする。巨峰か、シャインマスカットか。その一房がト音記号、一粒一粒が音符を連想させ好感度の一句。

満田 光生

真つ黒な軍手を洗ふ終戦日

佐藤 健

今は廉価な軍手も、かつては結構高価だった。使い捨てにせず真つ黒に汚れても洗つて使う生活に、「終戦日」が響き合う。戦時中の勤労動員、終戦後の物資欠乏の時代表を思わせる佳句。作者は終戦時一歳だが、昨年九月に急逝された。深悼。

水野 星間

はにかみて子は初潮告ぐみどりの夜

藤原はる美

年頃になれば女は初潮を迎え、男は夢精を経験する。女兒が打ち明けるのは母親であるが、果たして男児は如何するのか？マセ餓鬼であった自分でも、やはり困った。誰にも話せない。自分で独り納得させるしかない。男はつらいものだ。

宮腰 秀子

秋めきて夫亡きことがまだ不思議

三池 泉

春に亡くなられたであろうご主人、秋になった今でもふと亡くなったことを忘れてしまう。ある作家がこんな言葉を呟いていた。「あ、そうだ、もう君はいないのだ！」と。長年連れ添った夫婦だからこそその句、下五の「不思議」に身がたまされた。

宮澤 雅子

マスク縫ふミシンの音や金魚草

根岸 操

コロナ禍ということで、ひと頃マスクは売場から消えた。季語のマスクは季節を問わぬ必需品となった。やむなくミシンで縫うことになる。その音は作者のどんな気持を表しているのか。疲れた目は金魚草が癒すのだろう。

村山 良

朝顔に寝起きの顔を近づける

一ノ瀬順子

朝起きて窓を開ける。空は晴れて、書から開いた朝顔が葉陰から大輪の花を赤青白と咲かせている。思わず寝起きの顔を近づけた。朝顔を愛する人の朝の美しい風景を詠んだ素晴らしい御句であると思います。

山崎せつ子

迷わずにいつもの道のピラカンサ

宮腰 秀子

ピラカンサと言えばあの真赤な実がびっしりとついている植物である。遠くからでもよく見え、鮮やかな赤い実と緑の葉に心を奪われる。ピラカンサを見るとどこまで来たのかわかり、いつもの散歩コースを歩く安心感がよく伝わる。

山本ひまわり

青春の蹉跎^{さたて}踏みしむ曝書^{はくしよ}かな

諏訪部典子

この句を目にした時の胸のざわめきは今も続いている。作者は同じ時代を過ごして来た方に違いない。上五であの時代の映像が浮かび上がる。捨てるに捨てられぬ一冊が日に曝されて、若き日々の熱情と懊悩が甦る。

山本みつし

鬼やんま團十郎の睨みとも

稲吉 豊

大柄な鬼やんまが、ぐるり動かす眼。團十郎が御家芸の見栄を切る睨み。この取り合せの妙に感服いたしました。

俳句の滑稽も秘めて、私もこのような句境に巡り合いたいものと思いました。

渡部 洋一

多摩抜ける鎌倉みちの牛膝

今田 述

日課の散歩道での事である。今朝はいつとは別ルートの有名な「鎌倉街道」を抜けてみたのである。今も感じる先人の息遣いがするのである。足許に付着した牛膝は、きつと鎌倉武士の「魂」かもしれないと作者は、新たな発見をしたのである。

あけぼの便り

○「多摩のあけぼの」は中身が充実しており、とても勉強になります。編集担当の各位に感謝申し上げます。（飯島智）

○前号で拙句を鑑賞して下さいました岡崎万寿様、根岸敏三様、水落清子様、ありがとございました。コロナ禍とインフルエンザに気を付けて冬を乗り切りましょう。（一ノ瀬順子）

○昨年十月に卒寿を迎えました。これからよろしくお願い申し上げます。（上原重二）

○コロナ禍の編集作業は大変だと推察、感謝申し上げます。一度再開した公民館句会も、又12月は中止になりました。当分近所での一人吟行が続きます。来年のワクチン完成に期待する他なし。（亀津ひとり）

○今、感染症以降多くの人が経済的に困っています。俳句の結社に於いても同様です。そんな中で個人的にみても作句をつづけることは難しくなっています。地方組織（当会のような）が大切になってきます。同時に同人誌の合併も必要でしょう。考え方も変わる？（川島一夫）

○今年はついにコロナ禍に押し切られそう。どこもかしこも俳句会は通信へと移行。かくして通信句会を毎月捌いたエネルギーの持ち主が居るわけだ。煩雑さわかるこの作業は、私には不可能。まさに四方拝の態である。（川名つぎお）

○谷村鯛夢様、前号で拙句に暖かい句評をいただき恐縮しております。心よりお礼

申し上げます。この世の中のざわつきが収まったら一度、三社祭にも出かけてみたいと思っています。(神崎幸子)

○何とか生きております。句友には会いたいと思いつつもまだ怖さの方が先立ち、俳句研究会に出かけるのは考え中です。

(佐々木克子)
○早朝のウォーキングで眺める富士山を楽しませてもらっている毎日です。

(島田澄子)
○まさかの金婚式。日々出歩き、週一日の休肝日を守ったら健康体になりました。変わったことはレコードを整理し、大画面のユーチューブでジャズやクラシックを楽しんでいること。実感として益々元気になっています。ダイヤモンド婚式まで約三千回の食味酒楽、美味求真!

(清水弘二)
○コロナ禍で不安な状況が続いています。いくつかの文学作品の中で、感染症が起る度に人間や社会は似たような反応を繰り返しているように思いました。11月の俳句研究会楽しみにしています。

(白尾幸子)
○絲布みこ様、前号におきまして拙句を鑑賞いただきありがとうございます。今後の句作の励みとなりました。重々感謝

申し上げます。(玉井豊)
○「いつまで続くぬかるみぞ」昔そんな軍歌を歌ったような!今の道は雨水が土にかえることもない。舗装されたのに生活はいつまで続く何とやら!早く普通の生活の来ることを願っています。(玉木祐)

○幹事の皆様にはご厄介をかけて居ります。歩行が思うように出来ず悲しいです。役員だった当時、皆で話し合い笑いつつあの日々が懐かしいです。三橋先生を囲んで夜通し句会をした若き日、懐かしいかぎりです。昨今は、友人がひとりずつ逝ってしまうのが淋しいです。俳句のみが私の相棒です。(寺尾令子)

○コロナ禍の中で、「多摩のあけぼの」は遅延することなく発行されているのは凄いことです。会員一人一人、発行に携わる一人一人の努力があつてこそです。コロナウイルスの感染には十分気を付けて過ごしたいものです。(飛永百合子)

○外出しない日々が多くなり足腰が急激に弱くなりました。「多摩のあけぼの」が届きますと、一字一句零さないように読んでいます。百頁もあつたら出来ないことですが、個性豊かな句の数々心から楽しんでおります。(中田とも子)

○都立大での学びも二年目となり、南大沢

や多摩ニュータウン界隈を歩くことが多くなりました。(夏目重美)

○コロナ禍の一日も早い終息を願いながらも早何か月も過ぎ、昨今は三回目のピークかとも言われ、高齢者の私もおどろたびれています。何より皆様のお顔が見えずお声も聞けないことが一番寂しいです。早く皆様にお会いできる事を願いつつ、役員の皆様のご健康をお祈りしております。(西前千恵)

○鳥彩可様、136号で拙句「幸せは手のひらサイズさくら餅」を鑑賞していただきありがとうございます。コロナ禍のなか、迷いつつ俳句を詠む幸せを感じています。(根岸操)

○宮崎斗士様、前号で拙句「肩寄せし正月寄席はコロナ前」を探りあげていただきありがとうございます。コロナ下の寄席はどうなっているのでしょうか。かつてトリをつとめた四代目圓歌のはげしい飛沫がなつかしい。(野口佐穂)

○コロナ禍一長い一年でした。さて、来年令和三年に期待します。(花貫夢)

○無所属師系なし、投句先の乏しいものにとつては、コロナ禍の当会中止の已む無きは痛恨の極み。その間、役員、事務局諸兄各位のご尽力には心より謝意を申し

上げたい。私めは、余技手すさびの駄句の山、堆くなるこの頃。
(淵田芥門)

○前号では前田弘様、安達昌代様、米澤久子様に拙句をお取り上げ頂き嬉しく厚く御礼申し上げます。コロナに負けず作句に励みたいと思います。
(堀部節子)

○いつもお世話になっております。もうすでに両親はおりませんが、この世の中に生きていなくてよかったと、ふと思ってしまういました。
(前田光枝)

○お世話になります。佐々木克子様、吉村春風子様、前号で拙句をおとりあげ頂き厚くお礼申し上げます。巻頭に春風子様は当節の短詩系文学をきめ細かに分りやすくご評論頂き、中でも文中五行目の喫緊の文字に接し目から鱗が剥がれた思いでした。重ねて感謝申し上げます。お勉強致します。
(松本まり)

○新型コロナウイルスの感染問題でほとんどの句会や会合がなくなり、それに伴う慣例の飲み会なども全て機会を削がれています。寂しい限りです。
(三浦禎三)

○幸村睦子様、136号で拙句「春の前髪自分で剪ってステイホーム」を取り上げて下さってありがとうございます。何か月ぶりにマスクして美容院でパーマもかけました。
(三木冬子)

○やっと句会再開と思ったら、これまで以上の感染拡大、悩ましいことです。いつまでも句会を休会にしているのは俳句が滅びますね。新しい俳句生活様式確立の必要を痛感する此の頃です。
(満田光生)

○田山光起様、前号で拙句に共感していただき有り難うございました。奥様も味噌造りをされるとのこと、手前味噌大変ですがお互いに頑張りましょうとお伝え下さい。
(宮腰秀子)

○皆様お世話になっております。ウィズコロナの毎日、スペイン在住の50年来の友人から便りが！現在毎日一万人を超える感染者を出しているスペイン、大都市ではロックダウン状態が続いており、いつ終息するか判らないのが辛いと。日本も一日に東京500人、大阪300人、北海道200人が常態に。それでもスペインに比べれば自由度の高い現状です。辛抱強いご自愛を!!
(武藤幹)

○「麦の会」元会長の橋爪鶴磨さんのお葬式に参列しました。現会長の対馬康子さんを始め会員多数がお見送りしました。私も三十年以上にわたるご交誼に心からお礼をしてお別れして来しました。
(山崎せつ子)

○コロナコロナで出掛けることが少なく、

俳句も出来ず、足は弱るし身体は太るし、先のこと皆目見当がつかずにいます。皆様お元気で過ごして下さい。
(吉澤利枝)

○こんなに内容が素晴らしい会報は珍しいと思う。毎回楽しみにしています。
(吉田雄飛子)

コロナ禍に関わる諸事業の中止と変更について

昨年来の新型コロナウイルスの感染拡大は収束の見通しが未だ見通せない状況です。昨年末お知らせした通り、月例の俳句研究会は三月までは中止となりました。四月については開催の予定ですが状況により変更になる場合もあります。

三月に予定されていた令和三年度の定時総会も開催できません。承認及び議決いただく案件の資料を四月発行予定の本誌138号に掲載してご意見をいただくことといたします。

同時開催予定の陽春句会も中止いたします。ご応募くださった方準備中の方には誠に申し訳ございません。また毎年七月に行ってきた俳句大会は、今年は十一月の開催を予定しております。

第11回 俳句研究会

11月28日(土) 立川市子ども未来センター
担当幹事 戸川晟・秋山ふみ子・根岸操・

石橋いろり・佐藤八重子・

関 梓・山本ひまわり

満田光生

参加者 27名

★講話……小山健介氏「コロナ禍の中で」
小春日や猫が耳搔く後ろ脚 稲吉 豊
捨つるもの持たぬ気楽や着ぶくれて 吉村春風子
黄落を埒頭へ急ぐ水素バス 小山 健介
焼芋屋見ているだけのハイヒール 前田 弘
柿おちば老樹の実なほ熟し得ず 淵田 芥門
櫓田やほんとだったか母の恋 大槻 正茂
両の手に不義理いっぱい散紅葉 石橋いろり
目を遠くして冬の日につつまれる 山崎せつ子
山茶花や老いは時々ついてくる 前田 光枝
思い出の多き実家の花八つ手 根岸 敏三
古本も岩波新書も秋の暮 宮腰 秀子
リモートのくぐもる声や火恋し 秋山ふみ子
行く末を計れぬ今朝の寒さかな 山口 楓子
子のほかはレンタル七五三写真 永井 潮
枯木立真白き富士を従へて 山本ひまわり
木枯や足のもつれを抱き上げる 佐藤八重子
木守柿ひとつひとつに雀来る 根岸 操
大川は橋つぎつぎに都鳥 満田 光生

セーターの膨らむ翳の円乳かな 水野 星閣
また一人友の空席年流る 白尾 幸子
託されし後事のあまた花八手 関 梓
シャンパンの小気味よき音七五三 戸川 晟
さかぬ子の晴れ着一丁前七五三 石原 俊彦
紅葉高まり山の神集まりぬ 大友 恭子
福島的身もだえ続け秋を染め 櫻本 愚草
トランプさん鬼滅のマスク有りますヨ 三浦 土火
太陽にまみれて歩く冬の園 長澤 義雄

宮川としをさんご逝去

当協会参与の宮川としをさんは病氣療養
中でしたが、昨年9月10日86歳で亡くなら
れました。氏は当協会の会歌を作曲され、
参与として長くご指導を頂きました。
謹んでご冥福をお祈りいたします。

橋爪鶴磨さんご逝去

当協会顧問の橋爪鶴磨さんが昨年10月22
日病氣のため93歳で亡くられました。氏
は協会本部の重職を歴任され、当協会では
参与、顧問として長らくご指導を頂きまし
た。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

現代俳句「列島春秋」2020年 掲載句紹介

現代俳句協会の月刊誌「現代俳句」が毎
月「列島春秋」——地区別現代俳句歳時記
——として掲載した当地区の作品を紹介し
ます。

1月 掃除機の吸ひのこしたる冬日差 米澤 久子
2月 棟梁が春を留めおく槌の音 大槻 正茂
3月 落椿姿勢はなおも崩さず 根岸 敏三
4月 カツ井の三葉鮮やか荷風の忌 満田 光生
5月 水平線のみで佳しとす夏館 原口 海人
6月 未来とは大きな棘の茄子の花 川島 一夫
7月 涼しさは埴輪の腰のくびれかな 根岸 操
8月 シャンプーの同じ残り香夜の秋 高坂 栄子
9月 残る蚊の採血受けて屋台酒 関根 曳月
10月 冬めくや谷中の路地の猫たまり 河井 時子
11月 老いてゆくことにも手順帰り花 越前 春生
12月 我もまたムンクの叫び年の暮 中島 秀次

事務局だより

○当協会のお知らせ等はホームページからもご覧になれます。
「現代俳句協会」を探索し、「地区活動」から「関東ブロック」の「都多摩」へと進んでください。

★令和3年度定時総会

日時 令和3年3月28日(日)午後2時
会場 国分寺市 都立多摩図書館セミナー室
右の予定は中止することになりました

★陽春俳句会

今回は中止といたします。既にご応募いただいた方にはまことに申し訳ありません。

★春の吟行会

令和3年5月に予定しておりますが新型コロナウイルスの収束状況により決定いたしました。詳細は次号でお知らせいたします。

★会員の現況(11月末現在)

262名(正会員215名・一般会員47名)

☆新入会員 1名(敬称略) *印は正会員

*野島 正則(羽村市)

◆多摩地区協へのご入会は、随時受け付けております。現代俳句協会会員で多摩地区に在住の方は、会費は無料(申し込み手続き不要。それ以外の方は年会費2千円です。お問合せ・ご連絡は事務局(下欄枠内)まで

「多摩のあけぼの」編集担当幹事

関 梓(梓) 満田 光生(光)

飛永百合子(百) 山崎せつ子(せ)

永井 潮(潮)

俳句研究会

第2回 中止いたします

第3回 中止いたします

第4回 4月24日(土)午後1時(予定)

立川市子ども未来センター

立川駅南口徒歩13分

(とじ込みはがきの地図参照)

電話042・529・8682

*講話 前田 弘氏

(いずれも会費五百円、出句三句)

○感染防止を心掛け、体調不良(発熱等)の場合は積極的にお休みください。お出かけ前の検温とマスクの着用をお願いします。

〈在宅句会〉(投句参加)

▽開催日の一週間前までに投句してください。

▽出句は一人三句です。(選句はありません)

▽20×3cm程の短冊に一句ずつ書いてください。

▽参加費は千円です。(出句時にお送りください)

▽句会終了後、全作品の得点入り清記用紙と高点句、出句された作品の成績、寸評等を取り

ポイントとしてお送りします。

(投句先) 〒180-0006

武蔵野市中町3-29-19 蓮見 徳郎方

「俳句研究会」投句係宛

編集後記

☆バス停で知合いかなとお辞儀すると相手も返してくれました。お互いにマスクを深々と目元だけの表情、どうやら人違いでした。(梓)
☆コロナ禍の中でもコンサートや演劇は再開。聴衆あつての音楽、観客あつての演劇、句会あつての俳句。俳句も何とか知恵を絞りたい。(光)
☆思いがけない新型コロナウイルスが世界中に蔓延して拡大の一方である。三密を避けるなど私たち一人一人が身を守らねば。(百)

☆毎日、コロナという文字を見ない事はない。こんなことになるとは、早く終息して皆さんと句会を持てることを祈っている。(せ)

☆座の文学などと言われ、昔から仲間が一堂に会し行ってきた句会が今ピンチだ。コロナ禍で避けるべき3密に触れ、本人はためらい家族も出したがらない。会場の確保も大変で公共の施設では定員の半数しか入ることが出来ない。(潮)

―題字は三橋敏雄氏―

令和三年一月二十七日発行

発行人 吉村春風子

編集人 永井 潮

発行所

東京多摩地区現代俳句協会事務局

〒195-0055 町田市三輪緑山1-28-19

TEL 044-987-1716 稲吉 豊方

印刷所 株式会社 清水工房

TEL 042-620-2626

TEL 042-620-2626